

95号 1. 水谷理事長ご講演記録「志の中で」

— 新島襄永眠125周年 記念講演 —

- ・講師：水谷 誠氏（学校法人同志社理事長）
- ・演題：「志の中で」
- ・日時：2015.1.23 ・場所：聖ステパノ学園海の見えるホール（大磯町）

上記の講演を敷衍・要約した原稿を水谷理事長様より頂戴いたしました。

水谷 誠理事長は、新島の志を説くために、いくつかの情報を紹介し、それらを立体的に組み立てて話されました。その個々の情報は、同志社人としてとても重要な情報で、かつ切り口が新鮮でした。

< 59号の内容 >

（講演の冒頭に、講演の機会を得たお礼、この会場の聖ステパノ学園へのお礼、大磯町へのお礼、そして碑前祭への参加の御礼があり本論に入られた。）

1. 新島の誕生・脱国・ハーディー夫妻

今日は新島襄の教育思想について私なりの考えを述べさせていただきます。

新島襄について初めてお聞きになる方もおられると思いますので、少し一般的なことを紹介しながらお話いたします。

新島が生まれたのは、天保14年1月14日(西暦1843年2月12日)、江戸の安中藩の藩邸でした。幼名は七五三太(シメタ)です。安中藩邸は現在の神田の学士会館の所にありました。毎年そこでは生誕記念の碑前祭が催されています。現在、その辺りで再開発が進められており、新しく作られる公園の名前としてその地に新島襄が生まれたことに因んで彼の幼名を取り入れたものが検討されていると伝え聞いています。そのようなことになれば大変うれしいことです。

さて、新島は安中藩士の子、下級武士の子でありました。少年時代には、位が上の武士が向こうからやって来るとたとえ相手が年下であっても廊下隅に控えて、頭を下げて相手を通りすぎるのを待たなければなりません。このような封建的な在り方を不条理と捉えて彼の中に沸々と不満が湧いていました。そんなある日、江戸湾でオランダの黒船を見たのです。日本の船と比べ質も大きさもあまりにも違うので腰を抜かすほど驚いたようです。黒船を見て、日本の外では、どのようなことが起こっているのか、どのような国があり、それらの国はどのように成り立っているのかという問いかけは、日本の封建社会への不満と重なって、「我が国の全面的な改善と革新を求めるという大志を奮起させる」ものであったと後に記しています(「私の若き日々」My Younger Days)。新島は幼い時から漢

学や武術を学んでいましたが、長じて蘭学や航海術をさらに学び始めます。そのような時に、新島は安中藩の本家筋に当たる備中松山藩が購入した「快風丸」という洋式帆船に乗船する許しを藩の重役に頼んで得ます。

新島は、この快風丸の二度目の乗船で函館に出かけました。家族は、この長子が何を考えているのか薄々と感じていたようで、別れの宴は水盃でなされたと伝えられています。函館では、ロシア正教会のニコライ司祭に日本語を教え、代わりに英語を教えてもらうことになりました。このニコライは東京神田にあるニコライ堂のニコライです。函館で新島は密かに国を抜け出す準備をしていました。元治元年6月14日(1864年7月18日)の夜半になって函館で知り合った福士卯之吉に頼んで、和船に乗って沖に浮かぶベルリン号という商船に乗り込みました。その船で脱国し、まずは上海に行きました。上海ではワイルド・ローヴァー号に乗り換えて、積み荷を運搬しながら香港やサイゴン、マニラなどに寄港しつつ、アメリカの東海岸のボストンにやってきます。ボストンに到着したのは函館を出てから一年後の1865年7月20日のことでした。その間、新島は船長の身の回りの世話をし、また水夫としての労役に服しながら過ごしたのです。

けれどもボストンに着いて行くあてがあったわけでもなく、停泊した船の船内で三か月ほど留守番のようにして過ごしました。その間、不安にさいなまれ、夜も眠れない日々が続いたとのことでした。しかし、ある時にワイルド・ローヴァー号のテラー船長の紹介で船主のA・ハーディーさんがやってきて、新島に「何のためにアメリカにやって来たのか」と問いかけました。新島は懸命に英語で話しましたが通じなくて、ハーディーさんには後日文章にして彼の渡航の目的を伝えます。それを読んだハーディー夫妻は新島の志を受け止めて、パトロンとして彼を支えようと決心しました。

新島はハーディー夫妻の支援を得て、9年あまりのアメリカ滞在の間に3つの学校で学び、卒業しました。まずは高校にあたるフィリップス・アカデミー、そしてアーモスト大学、さらにキリスト教の牧師を養成するアンドーヴァー神学校です。この学びの期間に新島は教育事業に一身を打ち込むというその志を具体的に創り上げて、1874年にコロラド号でサンフランシスコを旅立ち日本に帰国します。横浜に着いたのは11月26日、一ヶ月弱の航海でした。そしてその1年後に同志社英学校を設立しました。

2. 当時の日本のキリスト教事情・同志社英学校開校

当時の日本、江戸幕府から明治新政府に移ったその時代はキリスト教にとってどのような時代だったのでしょうか。日本には昔からキリスト教を受け入れることが難しい土壌がありました。初めて日本にキリスト教が伝わったのは16世紀で、フランシスコ・ザビエルが鹿児島で布教活動を始めています。日本にいた2年間でおよそ700名の日本人をキリス

ト教(キリシタン)に改宗させたとされています。ザビエルはカトリックの修道会であるイエズス会をイグナチオス・ロヨラと共に立ち上げた人です。イエズス会は16世紀ヨーロッパで広がった宗教改革運動によって地盤を失ったカトリック教会の中で、その復興を目指して設立された修道会です。ザビエルはカトリックのキリスト教を海外にも広めようとして日本にやってきました。

その後、織田信長が布教を正式に認めたことからキリスト教は盛んになり、60万人のキリスト教徒が生まれ、社会に影響を及ぼしました。その勢力の膨張に危機感を抱いた豊臣秀吉は1587年にキリスト教を禁止し、宣教師を追放します。そして、江戸幕府になってからの1654年には「切支丹宗門の儀は是迄御制禁の通堅く可相守事」と書き記された「切支丹禁制の高札」が立てられます。これは1873(明治6)年まで220年もの間続きます。1873年に、明治政府はこの高札を撤去したのですが、そのきっかけとなったのは岩倉遣外使節団からの報告によります。日本は幕末以来、外国から押しつけられた不平等条約を撤廃し、対等の条約締結を願っていました。そのことと欧米の文化を視察するために岩倉具視を団長とする使節団を米欧に派遣しました。各国でのやり取りの中で条約改正の交渉については、日本はキリスト教を禁止していると反発を受けます。使節団はキリシタン弾圧が条約改正の障害となっていることを知り、1872年に本国の留守政府に「速やかに信教の自由を許さねば我々の任務は全うし難し」と打電をすることになります。それでその翌年の1873(明治6)年にキリシタン禁制の高札は撤去されました。しかし、全国各地の高札を一挙に撤去できるわけもなく、また200年以上続いたこの理解がにわかに消失したわけでもありません。新島が帰国したのは、その次の年の1874年11月のことであり、キリスト教への逆風の中で「敢えて風雪を侵して開く」寒梅のように同志社英学校を開校し、それ以来1890年1月に亡くなるまで新島は同志社教育の発展のため、学校の維持、資金確保のために東奔西走したのであります。(次の60号につづく)